

「胃癌精密 X 線検査—技術論序説」

癌研究会付属病院内科 丸 山 雅 一 著

国立がんセンター名誉院長

市 川 平三郎

素晴らしい本が出たものである。

著者の丸山雅一博士が、「早期胃癌研究会」で、呈示された X 線写真に対して、これは良くない、こんな写真では読めやしない、と大声を出しているのを見た人も多いだろうし、なかには、折角「胃と腸」に採用された症例に対しても辛辣な批評を書かれてしまった被害者もいるかもしれない。彼自身も序文で言っているように、なにゆえにそれらの X 線写真が良くないのか、その証を自分で示すために、文句を言うだけの理由を「絵」に語らせなければならぬまい、といった気負いがこもっている。名著と言ってよい。

本書には、著者が 30 年にわたって打ち込んできた胃 X 線診断の真髄が、ちょうど、美術館で名画をみるように展示されている。そのうえ、厳選された 52 例の症例には 1 つ 1 つの思想が込められている。

私は、医師ではないある著名な人から、“先生、微妙な診断ができるようなレントゲン写真を撮れるのは、概して美術というか、造形の美しさを感じることのできる人じゃないですか”と聞かれて驚いたことがある。

著者は、本書の中で“美意識”と

いう言葉を随所に使っている。本書は、前著「胃ルーチン X 線検査入門」（チーム医療版、1988）の続編ともいうべきものだが、“胃や大腸の X 線診断にのめり込んでいる輩は……美意識に溺れる人間”とすらい、その極が、精密 X 線検査であると言う。とことんまで美を追及し、その美が実際の臨床面でどんな効用をもたらしているかを、実に懇切に説明している。X 線写真の 1 枚 1 枚が、どういう方針で、どういう技術で、どういう手順で撮られ、美しい絵が得られたのか、誠に詳細に記述してある。読んでいるうちに、今、まるで自分で検査をしているような錯覚におちいり、引き込まれてしまう。左甚五郎が“眠り猫”という作品を黙って見せているのに対比すれば、どうやって猫を彫ったかを手を取って教えてくれていることになる。

形態学を専門とする者は、とかく名人芸だとか、職人わざだとか、あたかも科学的でないかのごとく言われがちだが、実は、そんなことはない。形態学的変化というものは、生化学的、生物学的など諸々の集積された総合的な結果の表題なのだ。現在のまだ単純すぎる科学では十分に

解析されていない領域なのである。

X 線診断は写し出された形から推察してミクロの世界の診断に迫ろうというのだから、まずもって正確に形を描写するのが第 1 歩なのである。その描写の段階で必要な職人芸を、余すところなく開陳している姿勢は尊い。

“大きな声で患者を励まし、今がもっとも大切な一瞬であることを感じとってもらようにします。術者の気合が患者に十分に伝わる努力をしないと、腹臥位二重造影法は成功しません”という記述。

“こうなると、頼りになるのは腹臥位の圧迫像しかありません。綿をちぎって病変のあたりに差し込み、ようやく図 32 E のように、陥凹の一部を描出できました。”

“目一杯押して、気持だけ引く”といった圧迫撮影法の感覚、などなど……。微妙な技の数々を惜し気もなく披露している。

こういう気迫が一体なんになるのか、などという説明はない。でも、本書は、X 線離れが嘆かれている昨今の風潮に、頂門の一針となることは間違いないであろう。胃 X 線検査に関心のある人達の必読の書と言えよう。

最後に、「絵」を主軸にした著者は、それを本の中に再現するため昼夜を分かたず協力してくれた癌研写真室の高野勝美氏と、今はなき桂子夫人に心からの感謝を捧げている。これまた、美を愛する真情の具体的表現と思われ、衷心から敬意を表したい。

●へるす出版 1989 ￥12,000(税込)